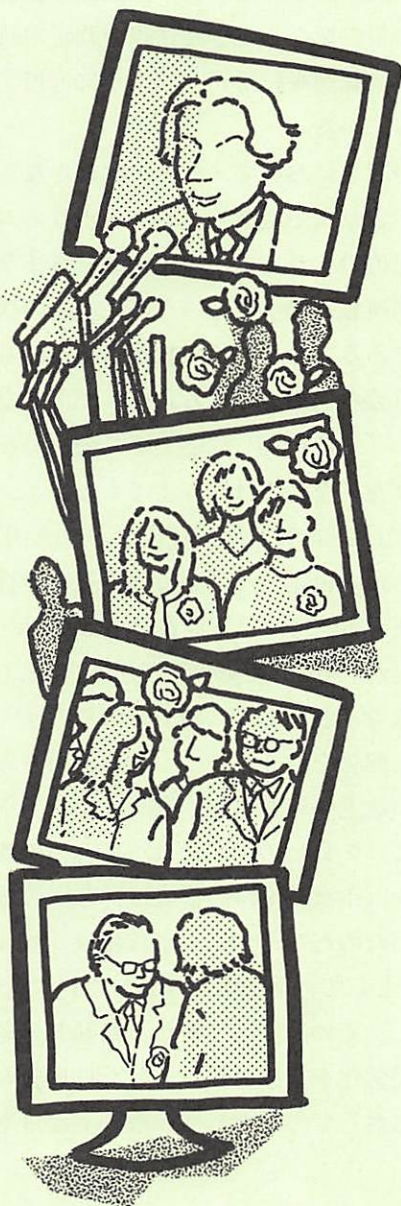


検証 2005.9.11

## 総選挙のテレビ報道



### CONTENTS

<b>特集1</b> 検証 2005.9.11 総選挙の テレビ報道:翌日夜の各局ニュース 番組分析から	2
テレビ朝日系「報道ステーション」	4
日本テレビ系「今日の出来事」	7
NHK「ニュース10」	8
TBS系「ニュース23」	12
フジテレビ系「ニュースジャパン」	13

<b>特集2</b> ケータイ社会を生きる —携帯電話とメディア・リテラシー	18
---	----

<b>報告</b> FCT第7回メディア・リテラシー 研修セミナー開催される	22
---	----

データバンク 海外篇	23
国内篇	25

# let GAZETTE

編集/執筆 Editor  
鈴木みどり (発行人代表)  
西村寿子

執筆スタッフ Staff Writers  
佐々木はるひ 新聞清子  
畠山亮太

データバンク Databank Writers  
高橋恭子 竹内希衣子  
中野恵美子 折茂あや

イラスト Art Director 市川雅美  
編集総務 Managing Editor 新聞清子  
定期購読・発送 Subscriptions & Shipping  
佐々木はるひ  
印刷 Printing 大信写植印刷株

FCT市民のメディア・フォーラムは、1977年の創設以来、視聴者、研究者、メディアの創り手が、性別、年齢、職業の立場、社会的地位を超えて社会を構成する一人ひとりの市民として集い、メディアをめぐる多様な問題について語り合い、実証的研究と実践的活動を積み重ねるためのひろば(フォーラム)として機能してきた。FCT活動は各地でのワークショップやシンポジウムの開催、調査報告書の刊行、など多岐にわたる。なかでも、すべての市民、特に子ども、女性、高齢者、障害者、民族的・人種の少数者などのマイノリティ市民の視座からメディアを読み解き、メディア社会を生きる力の獲得をめざすメディア・リテラシーの研究と実践は、FCT活動の中核をなすものである。

特定非営利活動法人  
FCT市民のメディア・フォーラム  
Forum for Citizens' Television & Media

理事 鈴木みどり、新聞清子、  
宮崎寿子、佐々木はるひ、  
高橋恭子、西村寿子、  
篠塚 公、黛 岳郎、  
谷内博一

Media Literacy Project in Japan :  
<http://www.mljp.org/>

事務所  
神奈川県横浜市中区新港2-2-1  
横浜ワールドポーターズNPOスクエア内

資料問い合わせ FAX0466-81-8307

銀行振込 東京三菱銀行藤沢支店  
普通預金 1559401

郵便振込 エフシーティー00190-3-84097

購読料 年2500円(3回発行)

## 特集1

# 検証 2005.9.11 総選挙のテレビ

2005年9月11日に実施された第44回総選挙は、小泉首相率いる自民党が「郵政改革」に焦点をしばって選挙戦を展開した結果、単独過半数の241議席を大きく上回る296議席を獲得し、公明党の31議席を加えると自・公連立政権で衆議院の3分の2を超える勢力になった。自・公連立政権で衆議院の3分の2を超えたことによって、今後、すべての法案は参議院で否決されても衆議院で再可決できることになるという新たな政治状況が生まれた。日本国憲法や教育基本法など戦後日本社会の根幹をなしてきた法律の改正が政治日程に上がっている今日、総選挙結果がどのように作用するか、大きな関心事となっている。

今回の選挙においてメディアはいかなる役割を果たしただろうか。言うまでもなく、ジャーナリズムとしてのメディアによる報道のあり方は、市民がさまざまな社会的課題について自ら判断し行動するという民主主義の根幹にかかわる重要な問題である。とりわけ、総選挙報道は有権者が一票を投じる上で重要な情報源となる。そうであるなら、報道においては市民の「知る権利」に応える「公正」な報道が貫かれていなければならないのは言うまでもない。

FCTでは2001年7月29日に行われた参議院通常選挙の際にも、市民の視座から開票特別番組を分析したが、その結果を「検証・参院選開票特別番組 テレビはどう『小泉現象』を構成したか」(FCTガゼットNo.75 2001.11)で特集し、テレビが有権者をどのように捉えているのか、政治とテレビがどのような関係を取り結びつつあるのかを考察した。

今回の総選挙報道でも、選挙中から「小泉劇場」と言われたように、テレビの画面には小泉首相の映像があふれていた。集中的な〈小泉映像〉の構成は、今回の総選挙ではなにを意味していたのだろうか。小泉首相は「郵政民営化法案を国民に問う」として、同法案に反対した自民党議員を「造反議員」と規定し、その選挙区に新たな候補者を送り込んだ。

郵政民営化を選挙の焦点とした自民党の戦略。テレビはこの戦略に対して、果たして、取り上げる選挙区や政治家とい

## 報道：翌日夜の各局ニュース番組分析から

う点で偏りのない報道をすることができただろうか。また、有力な「造反議員」に対して立てられた対立候補の多くが女性であったことから、テレビ画面にはこれまでになく多くの女性候補者が登場した。だが、メディアはこれらの女性候補者をどのように構成して提示したのだろうか。選挙報道の市民の「知る権利」に応える「公正」な報道とあわせて、メディアはジェンダーの「平等と公正」の観点から検証される必要があるだろう。

以上の問題意識から、FCTでは立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクトと協力して、急遽、分析チームを立ち上げ、総選挙翌日9月12日、全局の夜のニュース番組(東京をキー局とする民放4局とNHK)を対象にしてメディア・リテラシーのアプローチによる分析調査を行なうことにした。

調査の手順は、録画した番組のVTRを見ながら「ニュース番組の構成」記入シート(『新版Study Guideメディア・リテラシー入門編』117頁参照)を使って、ニュース項目の内容、時間量、CM時間量を書き出し、その「ニュース番組の構成」記入シートを使いながら、

(1)番組全体に占める総選挙報道の時間量と構成、番組に招かれるゲスト、取り上げる政治家や選挙区、(2)〈小泉映像〉および女性候補者がどう構成されているか、(3)有権者をどう構成しているか、などの点に絞って分析を行なった。

〈小泉映像〉については、さまざまな形で現れるので、つぎのように分類した。

### 〈小泉映像〉の分類

①9月11日、自民党開票センター(小泉首相

が一人でボードにバラの花をつける場面。自民党役員と共に花をつける場面など)

②ポスターなどの印刷物(小泉首相の選挙用ポスター、manifesto、垂れ幕など)

③選挙演説(小泉首相の選挙期間中の遊説場面。支持者に囲まれる場面など)

④9月12日自民党本部での小泉首相の記者会見

⑤9月12日自民党・公明党与党会議での小泉首相(連立政権維持を合意した会議)

⑥小泉首相の靖国神社参拝

⑦その他(たとえば、過去の映像など具体的に書き出す)

それぞれ クローズアップ(CU)のある場合は①CU、②CUなどと記入する。

なお、本研究プロジェクトは現在も継続中である。引き続き〈小泉映像〉、女性候補者、市民について、使われる映像言語を中心に、より詳細に分析していく。テレビによる今回の総選挙報道が、市民の知る権利に応える公正な報道といえるかどうかを厳しく検証するなかで、テレビのジャーナリズムとしてのあり方について議論し、その結果を「提言」としてまとめたいと考えている。

本誌におけるこの特集のために分析調査に参加したのは次のメンバーである：鈴木みどり、佐々木はるひ、新開清子、西村寿子。また、研究プロジェクトには立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクトのサリー・マクラーレン(同大学社会学研究科博士後課程)も参加している。

## テレビ朝日系「報道ステーション」

### ●番組と選挙報道の構成

番組の放送時間は21時54分から23時10分、時間量は76分である。このうち総選挙報道は56分28秒で、全体の77.5%、CMを除くと90.8%になり、選挙報道一色の構成となっている。メインキャスター古舘伊知郎、サブキャスター河野明子、コメンテーター加藤千洋（朝日新聞社）である。

番組の流れとしては、スタジオのオープニングから選挙結果の報道を取り上げ、5分間のVTR「“勝ち組”“負け組”一夜明けた永田町」（No.3）、つづいて約15分のVTR「あの候補者この候補者泣き笑いの舞台裏」（No.4）、4分間のVTR「自民党圧勝は歓迎？警戒？株価、財界、海外の反応」（No.5）、次に中継をまじえポスト岡田を扱う短いVTR（No.6）の後、約4分のVTR「選挙で何が起きたのか 東京では若年層ほど自民党」（No.7）となり、スタジオに戻って岩井奉信日大教授の話を交えて総選挙結果の分析をする（No.8）。スポーツニュースと天気予報をはさみ、安倍幹事長代理をスタジオに招くという構成である（No.11）。

なかでも、No.4のドキュメントは15分と長く、岡田夫妻の投票シーンから始まり、郵政反対選挙区を中心にVTRでつなげ、その間に〈小泉映像〉が5回挿入される。最後は鈴木宗男の娘が留学先へ帰るシーンで、選挙戦の終わりを父と娘の別れとダブらせる演出がみられる。登場する政治家の会見やインタビューには、時間量に差がある。長めのコメントでは、菅直人が小泉マジックを演出したとしてメディアを批判し、田中真紀子は絶対与党の誕生を憂い、土井たか子は護憲を訴える。

次に時間量の長いニュース項目はNo.11で、スタジオに安倍を招き、今後の抱負を古舘キャスターが聞く。その中で安倍に中長期的政策として憲法改正を明言させる。選挙翌日のニュースに、政権政党中枢の安倍氏（内閣改造で官房長官に抜てき）をポスト小泉の候補として持ち上げ、12分間もインタビューするという構成である。

### ●〈小泉映像〉

〈小泉映像〉は25回あり、選挙報道は56分28秒であるから、2分16秒に1回の割合で〈小泉映像〉が挿入されていることが分かる。

〈小泉映像〉が一番多いのは、①自民党開票センターで当確の赤いバラをつける映像で、10回ある。カメラの放列に向かい、ポーズを取る首相を斜め下から撮り、笑顔がクローズアップ（CU）される。次に多いのは④9月12日の記者会見で4回あり、目と眉が超CUとなる映像もある。表情は投開票日の笑顔から一転し、真剣さをアピールする顔にイメージチェンジしている。⑥靖国映像は1回で、韓国メディアが小泉批判をしていると報じている際のテレビ映像として、紋付、袴の正装で、首相をCUして強い意志を強調する。⑦その他は6回あり、選挙結果を示すグラフで自民党を示す部分に顔写真がつけられており、それが3回映し出される。

〈小泉映像〉はNo.6以外、選挙報道のすべてのニュース項目に挿入されている。それによって、小泉首相が主導する総選挙であることを強調している。

### ●女性候補者の構成

番組に登場する女性候補者は、自民党6人（そのうち新人5人）、社民党2人、無所属2人計10人である。

女性候補者が登場するのはNo.4、No.7、No.8である。No.4のドキュメントでは8人が登

場するが、新旧自民系候補者の小池百合子、片山さつき、佐藤ゆかり、藤野真紀子、野田聖子の各氏の場合、選挙事務所の中でバンザイをして当選を祝う支持者は、映像で見る限りほとんど男性である。女性候補者の政治的基盤を男性が支えているという構図である。

また、佐藤ゆかりの場合は、アイキャッチャーとしての扱いが目立ち、キャリアも紹介されず、政治的なコメントも特にない。事務所のバックにある化粧品のポスター風の巨大な顔写真の前に立つ映像や、投開票日翌日、男性に囲まれて神社へ参拝する様子がCUされる。No.8では、岩井教授の「地元へ嫁ぐ」というコメントに合わせて、片山、佐藤、西川京子、高市早苗（すべて自民党候補）の選挙中の映像が挿入される。

### ●市民、海外の反応の構成

「街の声」というニュース項目は特にないが、市民へのインタビューはNo.5とNo.7にみられる。No.5では北京市民男女に取材するが、2人とも小泉政権に批判的なコメントをする。

No.7では、自民党に投票した人のみ男女4人がそれぞれ、「民主党が頼りないから」「郵政民営化に賛成だから」「小泉さんに期待して」などと、ニュース項目の趣旨に沿った発言をしているのを取り上げる。また、参院不要論浮上に言及する際には、金融業の男性が「政策決定に時間がかからなくて経済的でもある」、営業職の男性は「自民党が勝ち過ぎて、独裁的になりすぎないといいのですが」とのコメントを使用。

このような「街の声」としての市民とは別に、No.7では、無党派層の動向を解説する部分の映像として、選挙演説を聴く人びとの映像が6ショット挿入されている。街頭演説会に集まった豆粒のような人びとのへり映像、壇上の演説者を一斉に見つめる人びと、候補者を歓迎し、配られたうちわを一様に振る映像と、どれも有権者を「群」として映し出す映像である。このように選挙の主体は、選挙権をもつ市民であるという発想が感じられない構成といえる。

### テレビ朝日系「報道ステーション」(2005.9.12 21:54-23:07)

No.	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
1	21:54:00		番組ロゴ BGM		00:21
2	21:54:21	スタジオ	古館伊知郎・河野明子キャスター		01:24
-	21:55:45		提供主名(背景:開票センター小泉首相映像)、CM	①CU	01:10
3	21:56:55	VTR	「勝ち組」「負け組み」一夜明けた永田町 「自民党本部」小泉(会)「総理官邸」竹中(会)/小泉/「公明党本部」神崎武法(会)「自公党首会談」神崎/小泉/「民主党開票センター」岡田克也(イ)「民主党役員会」岡田/藤井裕久/川端達夫/仙谷由人(イ)/枝野幸男(イ)/岡田/小澤/菅/野田/前原	②CU ④CU④超CU目、眉 ⑤CU	05:12
4	22:02:27	VTR	「あの候補者この候補者泣き笑いの舞台裏」 「三重・四日市市」投票岡田夫妻(イ)「総理官邸」小泉(会)「富山・南砺市」綿貫民輔(イ)「長野・軽井沢町」田中康夫(会)「豪雨の東京映像/10.11「選挙ステーション」映像」福岡2区「山崎拓」群馬4区「福田康夫」党本部小泉/「静岡7区」片山さつき(会)「浜」城内実(会)「東京10区」小池百合子(会)「小林興起」岐阜1区「野田聖子(会)/佐藤ゆかり(会)「愛知4区」藤野真紀子(会)「広島6区」堀江貴文(会)「亀井静香(イ)「開票センター」小泉「赤」/安倍/「民主党本部」岡田「あせり」/「北海道ブロック」鈴木宗男(会)「近畿ブロック」辻元清美(会)「茨木7区」中村喜四郎(演)「東京4区」中西一善(会)「滋賀2区」小西理(会)「野中廣務」京都4区「田中英夫(会)「東京12区」八代英太(会)「近畿ブロック」土井たか子(会)「岐阜4区」藤井孝男(会)「神奈川14区」藤井裕久(会)「開票センター」武部・小泉/「東京ブロック」清水清一郎/「開票センター」小泉/選挙ポスター「福島瑞穂」保坂展人(会)「富山3区」綿貫民輔/「東京18区」菅直人(会)「新潟5区」田中真紀子(イ)「岐阜1区」野田(イ)「静岡7区」城内/阿部卓也/「岐阜市伊奈波神社」佐藤ゆかり(イ)「静岡7区」片山さつき(イ)「長女留学先へ戻る」鈴木・貴子(イ)「鈴木(涙目の顔)CU	⑦CU会 見 ①CU ①CU ①CU ①CU	15:56

(つづく)

## テレビ朝日系「報道ステーション」(2005.9.12 21:54-23:07)

(つづき)

No.	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」: テロップ引用、(イ): インタビュー、(会): 会見、(演): 演説、(他): その他	小泉映像	時間量
5	22:18:03	VTR + スタジオ	「自民党圧勝は歓迎? 警戒? 株価、財界、海外の反応」 開票センター小泉・安倍/株価/奥田経団連会長(会)/ブッシュ/「CNN」テレビ映像小泉・CNN男性アナ/小泉・CNN女性記者の分割画面「記者会見を8分間全世界へ生中継」/「韓国メディア」/「京郷新聞」掲載の開票センター小泉写真と「皇帝の誕生」の見出し/「MBCテレビ」映像の靖国神社参拝の小泉/中国・上海紙「東方早報」見出し「洗脳」/「小泉劇場が続く」の文字/上海で取材、中国市民女性20代(イ)/男性20代(イ)/政治日程紹介、河野/古館/加藤千洋コメンテーター/小泉/加藤/古館	①CU ⑦TV画面CU ⑦同上 ①CU ⑥CU ④CU	04:02
-	22:22:05		CM		01:30
6	22:23:35	中継 + VTR	「ポスト岡田は誰に、ベテランか? 若手か」 国会記者会館より細川隆三記者中継、映像として岡田/菅/仙谷/枝野/岡田/細川/小澤/鳩山/前原		02:30
7	22:26:05	スタジオ + VTR	「選挙で何が起きたのか 東京では若年層ほど自民党」 武部勤(会)/開票センター小泉/グラフ「全国政党支持率」に顔写真小泉・岡田/男性20代(イ)/女性60代(イ)/峰久和哲朝日新聞社部長の解説/「東京の小選挙区」菅/男性20代(イ)/女性20代(イ)/峰久解説の続き/映像として演説小泉/演説小泉/池田元首相	①CU ⑦グラフ ③CU ③CU	03:39
	22:29:44		CM		01:30
	22:31:14		(続き)「選挙で何が起きたのか 自公2/3超の憂い」 片山/小池/佐藤/男性20代(イ)/男性40代(イ)/開票センター小泉・武部	①	01:08
8	22:32:22	スタジオ + VTR	「歴史的圧勝の自民党 都市型に変わった?」 岩井奉信日大教授の解説/片山/佐藤/西川/高市/堀江/亀井 「都市型自民党の実像、利益優先型残る地方」 加藤の解説/グラフ「政党別議席数」の顔写真小泉・岡田 「民主党惨敗の要因と“社民主義”支持者の選択」 岩井の解説/グラフ「政党別議席数」の顔写真小泉・岡田 「英国の政権交代に学ぶ 2大政党の“スウィング”」 岩井の解説/グラフ「英国2大政党議席数」の顔写真サッチャー・メイジャー・ブレア/岩井/古館	⑦グラフの顔写真 ⑦グラフの顔写真	10:30
-	22:42:52		CM、提供主名(開票センター安倍・小泉)、CM	①CU	02:00
9	22:44:52		スポーツニュース		02:03
-	22:46:55		CM		02:00
10	22:48:55		天気予報		01:18
-	22:50:13		CM		02:00
11	22:52:13	スタジオ + VTR	「安倍幹事長代理生出演 自民圧勝の胸の内」 スタジオに安倍が登場し対談/古館/安倍/VTR国会内の城内/スタジオの安倍/古館/安倍 「ポスト小泉あと1年後」 小泉(会)/スタジオの安倍/古館/安倍	④CU	12:17
-	23:04:30		CM		02:00
12	23:06:30		File 経済成長率プラス1.1%→3.3%		00:22
	23:06:52	スタジオ	エンディング		00:08

## 日本テレビ系「今日の出来事」

### ●番組と選挙報道の構成

日本テレビ系「今日の出来事」の放送時間は22時54分から23時40分で時間量は46分である。全体の流れは、スタジオで小栗泉アナウンサーが、ゲストの小池百合子環境相を紹介。スタジオにはバックに小泉首相、岡田代表の巨大な写真が設置されている(No.1)。スタジオからCMをはさんで「明暗分けた小泉劇場壊滅的な敗北岡田民主党の苦悩」と題した2分のVTR(No.2)。続いて岡田民主党の敗北は小泉劇場の結果、という問題提起の後、約7分間のVTR『『造反組』『刺客』それぞれの熱きたたかい』(No.3)。ここでは、民主党の敗北から始まり、それをもたらした小泉劇場としてVTR『『造反組』『刺客』それぞれの熱きたたかい』では、郵政反対議員とその選挙区へ送り込まれた候補者の対比で構成されている。岐阜1区の野田と佐藤。東京10区の小林興起と小池。茨城7区の中村喜四郎と永岡桂子。広島6区の堀江と亀井といった構成である。

スタジオに戻って数字を使いながら「都市部での自民党の躍進」を解説(No.4)。次にそれを受けてスタジオでゲストの小池に圧勝の原因を聞く(No.5)。このあと、小栗アナウンサーと粕谷賢之日テレ政治部長が聞き役となって、番組が設定したテーマのVTRを見てゲストの小池氏が答えるという構成が続く。

VTR「どうする参院造反組」(No.7)では、参議院で郵政法案に反対した自民党議員が映し出され、その後、小池が今後の対応について答える。次のVTR「巨大与党の意味」では、街の声として自民党に投票した市民のイ

ンタビューを使いながら、市民は郵政民営化しか知らないが、実は自民党はマニフェストで「憲法改正」「教育基本法改正」「防衛庁改革」などを明言していることを強調する(No.8)。このVTRを受けて、小池に「自民2/3で歯止めは利くか」ということを質問する。

総選挙関連の事件が2本、その他に選挙以外のニュースが5本。総選挙報道の時間量が全体の72.5%、CMを除くと88.0%となっている。

### ●〈小泉映像〉

スタジオに小泉首相と岡田代表の巨大な写真を数枚ずつ配置。スタジオでゲストに招いた小池に話を聞く場面では、必ず小池を右側か左側の横から撮影し、右側から撮るときはスタジオに配置されたVTRの〈小泉映像〉、左から撮るときはスタジオの小泉首相の写真が画面に映し出されるようになっている。スタジオの小池氏の背景には常に〈小泉映像〉が存在する設定になっている。

また、小池が首相の決意や覚悟を語るときには、スタジオの巨大写真の目の超クローズアップとなり、選挙中に改革を訴えたことが理解されたと小池が語る場面では、首相が遊説先で大きな身振りで演説したり手を振ったり、首相の顔写真が入ったうちわを持って演説するVTR映像が使われている。

### ●女性候補者の構成

No.3では、野田と佐藤の「女の闘い」という構図で構成されている。まず、8月12日の野田の「自分の選挙のために自分の信念を曲げるわけには参りません」という黒いスーツで涙の演説シーンから始まり、「あの涙から1ヶ月」というナレーションとともに、選挙運動中の野田(夫と一緒に街宣車の前で演説。

テロップでも「夫」と出る)と佐藤が交互に映し出される。最終日も商店街で佐藤の支持者が「ゆかり」コール、野田の支持者が「聖子」コールをするというシーンで構成されている。開票日も「女の闘いは最後までもつれた」というナレーションで、野田事務所のパンザイシーン、敗れた佐藤事務所と交互に映し出される。翌日も、グレーのスーツ姿、事務所前で「仕事してます」と言う野田に対して、音声なしで神社に参拝する佐藤の映像、という構成である。

茨城の永岡桂子候補は、小選挙区で敗れて壇上でお詫びをしているところ(テロップは「夫の弔い合戦」)に比例での当選の知らせが入って一転壇上で2人の若い女性と抱き合っただけで喜ぶシーンが使われている。女性候補者はベテランの野田も新人の永岡も夫との関係で捉えられ構成されている。

### ●市民の反応の構成

No.8で7人(女性5人、男性2人)の市民にインタビューしているが全員自民党に投票した人びとである。テーマ自体が「巨大与党3分の2の意味」である。自民党が郵政改革以外に「憲法改正」「教育基本法改正」「防衛庁を防衛省」という政策をマニフェストで打ち出していることをあげながら、市民のインタビューでは「小泉さんがいいかなと思って」「(自民党の政策について)あまり深くない」などのコメントを使っている。

映像では、全員が曖昧な笑みを浮かべて、自信なさそうに答えている場面で構成している。市民が自民党の政策には関係なく小泉首相のカリスマ性を支持したかのように構成し、その市民とは「主体性のない」人びとであると捉えている。

## NHK「ニュース10」

### ●番組と選挙報道の構成

「ニュース10」の放送時間は22時から22時55分で時間量は55分である。「自民圧勝」のテロップが出される。ワイドショーの影響がNHKにも及んで、オープニングではそのような映像技法を用いている。オープニングに続いて、スタジオでキャスター今井環、有働由美子がゲストの安倍晋三幹事長代理を紹介(No.2)。2人のキャスターが番組のテーマについて説明。続いて「自民圧勝 与党で3分の2」と題したVTR(No.3)。VTRでは、自民党本部の小泉首相、武部幹事長のクローズアップで始まり、武部がボードに赤い花をつけるときは早送りになっている。続いて、東京10区の小池百合子、東京3区石原宏高、岐阜4区金子一義など自民党議員を登場させ、翌日の小泉首相の記者会見、公明党の神崎代表の会見へと続く。

続いて安倍に「小泉総裁任期延長」などについてスタジオで4分インタビュー(No.4)。CGで「『郵政分裂』選挙区の勝敗」を解説した後、2分間ずつのVTRで「郵政分裂選挙・岐阜1区」(No.6)、「郵政分裂選挙・静岡7区」(No.7)と続く。VTRでは岐阜1区の野田聖子と佐藤ゆかりを対比させた構成で選挙中、投票日、投票日翌日と映像を出すのが、いつの映像かは不明。それと同様に静岡7区で片山さつきと城内実を対比させた構成のVTRを用いている。

スタジオに戻って、約7分安倍に「地方組織との関係」「靖国神社」などについてインタビュー(No.8)。次に別の短いオープニングが



あって、3分のVTR「大敗の民主党 17日に代表選」となる(No.9)。ここでは岡田代表のクローズアップ、ズームアウトなどの映像がかなり出てくる。

次に約2分で国内の反応(No.11)、約3分で海外の反応をVTR(No.12)で挿入。最後に、スタジオで政治部の記者をまじえて約5分近く今後の政局について話す(No.13)。

NHKは他局と比較しても「自民圧勝」を中心にニュースを構成している。自民党以外には連立与党の公明党、野党第1党の民主党しか登場させていない。選挙関連以外のニュースは5項目。総選挙報道の時間が37分47秒、全体の68.1%。

#### ●〈小泉映像〉

「自民党圧勝」をメインにニュースが構成されているためか、〈小泉映像〉がオープニング、No.3のVTRで多用されている。約3分で伝える海外の反応でもアメリカのブッシュ大統領と2003年に会談しているVTR、中国と韓国の反応を新聞記事で構成するシーンでも写真で〈小泉映像〉を使用している。

#### ●女性候補の構成

NHKでは他局では出なかった自民党の猪口邦子がオープニングに登場。No.3では公明党の浜四津敏子が記者会見で神崎代表が質問されている横で一瞬、音声なしで映し出される。

女性候補で中心的に取り上げられているのは片山と野田。片山は、新幹線を降りたときに自民党支持者が大勢集まり歓迎され、「こんなの、こんなの」と驚くシーン、小泉首相との演説シーン、投票日はピンク色のスーツでパンザイシーン。ここでは、ロングショットからズームインされて超クローズアップ映像にな

る。翌日は緑色のスーツでインタビュー準備に少しイライラしている場面で構成している。

野田はVTRドキュメントで男性と挨拶、最後のグレーのスーツで岐阜市役所に挨拶、テロップと音声と同じ。佐藤のまわりの人も男性。商店街でも男性に挨拶。野田の映像と比べると佐藤は常に自民党の運動員と一緒に、あまり市民に挨拶する映像がない。佐藤は、「岐阜に嫁ぐ」という選挙中のインタビューのセリフがここでもVTRで使用されている。

#### ●海外、市民の反応の構成

NHKは海外の反応に3分34秒をあてている。アメリカに1分28秒、中国に1分32秒、韓国に34秒である。アメリカの反応ではジョージ・ブッシュ大統領、ローラ・ブッシュ夫人を登場させ「イラク復興や6カ国協議など日本の後押しを期待」というナレーション。次に03年5月に首相が訪米したときの映像を使用。ケント・カルダー教授にインタビューし「政治基盤が安定した今こそ小泉首相は明確な主張を持つ自立した外交をすべき」とのコメントを使用。中国の反応では「人民日報」を使い、男性記者がレポート。劉江水清華大学国際問題研究所教授にインタビュー。韓国の反応ではKBSのニュース番組を使用し「右傾化」への警戒というナレーションを使っている。どの項目にも小泉首相の映像や写真を挿入している。

国内の反応では、NHKは男性ばかり4人にインタビュー。しかも「各界を代表する」社会的地位のある人ばかり。コメントは景気、仕事等について「…してもらいたい」「…してほしい」「…いただきたい」という市民と政治家の関係を上下関係として捉える発言ばかりを採用している。

## 日本テレビ系「今日の出来事」(2005.9.12 22:54-23:38)

No	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
1	22:54:00	スタジオ	番組ロゴ/オープニング 小泉栗キャスター・小池百合子/スタジオのバックに小泉首相・岡田代表の巨大な写真(小泉中心のカメラワーク)	⑦CU(スタジオの写真)	00:48
2	22:54:48	VTR	「明暗分けた小泉劇場 壊滅的な敗北 岡田民主党の苦惱」 投票前日岡田(演)/「惨敗」岡田(会)/「ポスト岡田は？」鳩山/小沢一郎/菅直人(演説)		01:02
	22:55:50		CM		01:00
	22:56:50	VTR	(続き)「壊滅的な敗北 岡田民主党の苦惱」 小泉/岡田(イ)/菅(イ)民主党役員/岡田	⑦ (国会内)	01:06
3	22:57:56	VTR	「造反組」「刺客」それぞれの熱きたたかい 野田聖子(会)/野田(演)・「夫」鶴保康介/佐藤ゆかり(演)/野田(演)/「東京10区」小池百合子(会)/小林興起/小林(会)/「半分近く敗れた造反組」田中英夫/野中広務(イ)・田中/自民大勝/小泉/青木幹雄/「岐阜1区」野田/「比例復活」佐藤(会)/「茨木7区」中村喜八郎/「夫の弔い合戦」永岡桂子(会)/「広島6区」堀江貴文(会)/亀井静香・綿貫民輔/亀井(会)/小泉(会)/野田(イ)/佐藤/自民、公明/小泉	①CU ④CU ②CU ⑦ (国会内)	07:48
4	23:05:44	スタジオ	「都市部での自民党の大躍進」寺島淳司キャスター		01:06
5	23:06:50	スタジオ + VTR	「“圧勝”小池百合子氏なま出演で語る」 「自民圧勝その理由は？」小栗/小池/粕谷賢之日テレ政治部長/小池(バックに小泉映像)	②XCU ①CU、③ ⑦XCU (ス)	03:42
6	23:10:32	中継+V	「政治は夜動く どうする？ポスト岡田」中村洋介記者/岡田/菅(イ)/前原/小沢		01:18
	23:11:50	スタジオ	「“圧勝”小池百合子氏なま出演で語る」 「岡田民主党なぜ惨敗」小池(バックに小泉巨大写真)/岡田	⑦ X CU (ス)	01:45
7	23:13:35	VTR	「どうする大仁田氏参院造反組は」新党日本新井広幸/大仁田厚・堀江/大仁田(イ)/二之湯智(イ)/秋元司/鴻池祥肇/小泉・佐藤/小泉・小池/滝実/小林/滝/荒井(イ)/自民党本部/参院本会議中曾根弘一/青木(イ)/自民党本部小泉	①、③、② CU、②、 ⑤CU、 ①CU	05:05
	23:18:40	スタジオ	「“圧勝”小池百合子氏なま出演で語る」 「郵政反対議員その責任は？」小池(バックに小泉巨大写真)	⑦ X CU (ス)	01:20
8	23:20:00	VTR	「巨大与党の意味」20代女性2人(イ)/20代男性(イ)/マニフェストの小泉写真/小泉(演)/50代女性(イ)/20代男性(イ)/50代女性(イ)/自民党本部小泉(会)/巨大ポスター小泉/マニフェスト「憲法改正」「税制の見直し」「教育基本法改正」/50代女性(イ)/「防衛省」に	①、③、② CU、 ①CU	03:20
	23:23:20		CM		01:00
	23:24:20	VTR	公明党本部/自民党の「右」の部分(内部資料の文字)/小泉(演)/「防衛庁を防衛省に、自衛隊員に一層の名誉と誇りを」/党本部小泉(会)/党本部小泉	①、④CU、 ③、④CU	01:48
	23:26:08	スタジオ	「“圧勝”小池百合子氏なま出演で語る」 「自民党2/3で歯止めは利く？」小池(バックに小泉映像)	①CU、③	02:30
	23:28:38		CM		01:00
9	23:29:38		19の家庭用品にアスベスト 経産省が発表		00:53
10	23:30:31		東京10区小林興起氏の私設秘書2人逮捕		00:29
11	23:31:00		声明アルカイダの米国人？新たなテロ予告		00:30
	23:31:30		CM		01:30
12	23:33:00		ディズニーランド香港でオープン		00:30
13	23:33:30		国産牛肉の小売価格が最高値		00:26
	23:33:56		CM		02:04
14	23:36:00		天気予報		00:58
15	23:36:58		6カ国協議 米朝の溝深まる		00:22
16	23:37:20		エンディング		00:02

## NHK「ニュース10」(2005.9.12 22:00-22:55)

No	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
1	22:00	OP	「 <b>自民圧勝</b> 」小池百合子・猪口邦子、片山さつき、 <b>小泉純一郎</b>	④	0:31
2	22:00:32	スタジオ	「 <b>自民党圧勝 与党327議席獲得</b> 」安倍晋三の紹介、番組のテーマ質問		0:58
3	22:01:30	VTR	「 <b>自民党圧勝 与党で3分の2</b> 」映像:自民党本部、武部勤、小泉「東京10区」小池百合子「東京3区」石原宏高「岐阜4区」金子一義、小泉(会)自民党の議員、小泉と公明党、神崎武法(会)・浜四津敏子	①CU ④CU ⑤	4:14
4	22:05:40	スタジオ	安倍晋三(イ)「小泉総裁任期延長は」「後継総裁選びは」「郵政法案は」	④CU	4:07
5	22:09:47	CG	「 <b>郵政分裂</b> 」選挙区の勝敗		1:14
6	22:11:10	VTR	「 <b>郵政分裂選挙・岐阜1区</b> 」野田聖子(イ)/佐藤ゆかり(イ)		2:13
7	22:13:20	VTR	「 <b>郵政分裂選挙・静岡7区</b> 」城内実(イ)/片山さつき(イ)	③	2:09
8	22:15:30	スタジオ	安倍晋三(イ)「 <b>“反対”無所属議員どう反応</b> 」「地方組織との関係は」「安倍幹事長代理に聞く」「 <b>郵政法案後の課題は</b> 」「靖国神社参拝は」「日朝関係」		7:46
9	22:32:20	OP	岡田克也(会)「 <b>落選</b> 」「代表代行」「副代表」「副代表」「元副代表」「元幹事長」「 <b>64議席減</b> 」岡田(会)		0:23
10	22:23:28	スタジオ -VTR	「 <b>大敗の民主党 17日に代表選</b> 」会:岡田、民主党の会議、岡田と記者、鉢呂国対委員長(イ)、枝野幹事長代理(イ)、岡田の番組の映像	①グラフ	3:04
11	22:26:55	スタジオ -VTR	「 <b>自民党圧勝 国内反応</b> 」東京証券取引所 奥田会長-日本経団連(会)/小倉康宏会長-大田工業連合会(イ)/藤啓理事長-若者の就職支援のNPO(イ)/堀田力代表-高齢社会NGOの代表者(イ)		2:10
12	22:29:09	スタジオ -VTR	「 <b>自民党圧勝 海外の反応は</b> 」「 <b>アメリカは</b> 」ジョージ・ブッシュ、ローラ・ブッシュ/ケント・カルダー教授(イ)「 <b>中国は</b> 」劉江水教授 清華大学(イ)、中軍、政府の代表者「 <b>韓国は</b> 」韓国のニュース番組の男性と女性アナ。	⑦ブッシュと一緒に、中国と韓国の新聞に写真	3:48
13	22:32:53	スタジオ	NHK政治部の伊藤雅之の解説 「 <b>自民圧勝 296議席</b> 」結果のCG「 <b>自民圧勝郵政法案は</b> 」小泉(会)、「 <b>イラク派遣は靖国参拝は</b> 」イラクで米軍/小泉/「 <b>代表辞任</b> 」民主党は」岡田(会)/民主党の会議	④⑥	4:53
14	22:37:47		スポーツ		4:29
15	22:43:16		ハリケーンカトリナ/ブッシュ、9.11記念、「 <b>ハヤブサ</b> 」、大阪で熱中病、ガザからイスラエル軍の撤退		5:15
16	22:48:40		気象情報		5:14
17	22:53:52		マーケット情報		0:22
18	22:54:21		「 <b>ぎんなん</b> 」の風景		0:39



## TBS系「ニュース23」

### ●番組と選挙報道の構成

「ニュース23」の放送時間は22時54分から23時50分で時間量は56分である。オープニングに続いてスタジオで筑紫哲也、世古忠彦、草野満代キャスターがゲストのジェラルド・カーティス教授を紹介(Na.2)。つづいてVTRで選挙一夜明けた自民党と民主党の様子を伝える(Na.3、4)。その次に、VTR「当選ドキュメント 劇場の主役たちは」が6分(Na.5)。それを受けてスタジオで約3分カーティス氏に「列島に吹いた小泉旋風」「有権者は何を選んだか」を聞き(Na.6)、2分のVTR「街の声」「自民圧勝に海外の声は」(Na.7)が入る。それを受けて、スタジオで約6分「日本の政治は変わったか」「コイズミ政権のゆくえ」についてカーティス氏を交えて話すという構成になっている(Na.8)。選挙関連の事件が2項目、多事総論も選挙関連、その他のニュースが6項目。総選挙報道の時間量は、26分30秒、全体の47.0%、CMを除くと55.9%となっている。

総選挙関連のニュース項目は、まず、スタジオからVTRで自民党と民主党のレポート(時間量は民主党が2分の1)。次のVTRドキュメントでは、東京10区、広島6区、岐阜1区、静岡7区など郵政反対議員ないし無所属新人候補と自民党候補との対比で構成されている。つづいて、同じVTRドキュメントの中で「泣いた人笑った人」というテロップで裁判中の鈴木宗男、執行猶予中の辻元清美候補が取り上げられている。また、「珍事」として比例区の議席が自民党から社民党に移った

ことを取り上げて、バラエティ番組に出ている社民党福島党首と小池環境相を登場させる。次にスタジオに戻ってカーティス氏に話を聴くがこのときにもスタジオのVTRには小泉映像が頻繁に出てくる。この後、「街の声」、スタジオでのインタビューと続く。

### ●〈小泉映像〉

オープニングでは、小泉スーパーマンが国会に空中から2回、激突して国会議事堂を破壊するCGで始まるが、音声は機械音で「ナンテッタコイズミ」と入る。スタジオでゲストに話を聞くときでも、スタジオに配置されているVTRは繰り返し自民党開票センター、自民党本部での記者会見の時の〈小泉映像〉を流している。

また、「自民大勝に海外の声は」でも中国が靖国神社参拝を批判しているというニュースで、映像は首相が紋付・袴の正装で神殿を歩いている姿を下からのカメラワークで撮った映像を使用。番組は主観的には小泉圧勝に対する危機感や批判を含んでいるつもりかもしれないが、使用している〈小泉映像〉は他局同様に好意的な映像ばかりである。

### ●女性候補者の構成

小池、野田、佐藤、片山、福島、土井、辻元と取り上げる女性が他局と重なっている。Na.5のVTRドキュメントの最初に「当落ドキュメント“刺客”選挙区は」とテロップが出るが、「刺客」の文字がわざわざ赤字にしている。

小池は、事務所で神棚を背景に「バンザイ」。後ろに若い男性が控えている。野田は、翌日の事務所前でインタビューされるが、「自民党との関係は」という質問でカメラが野田を超クローズアップして表情を捉えようとする。野田は一瞬考え「そりゃ仲良くしたいで

すよ」と答えるが、横向き、うつむき加減の暗い印象を与えるショットが使われている。投票日翌日の佐藤の場合は、白いスーツで神社に参拝、神主が太鼓をたたいた後で拍手をうって神殿に深々とお辞儀。絵馬の前でインタビューされる構成である。

片山は、事務所で一段高いところからバンザイ、赤いスーツの候補者に赤い紙ふぶきが降り注いでいる。翌日は緑色のスーツでインタビューされているが、カメラ位置は下からの構図で「キャリア官僚」に対する視線を構成している。社民党の福島党首はこの局でもやや軽い扱いで、ワイドショーに出演しているシーンを使用されている。土井は「報道ステーション」に出てくるインタビューの後の無然としている表情だけが使われている。辻元は女性支持者に囲まれて「きよみとゴー」のかけ声でバンザイシーンと翌日駅頭で当選の挨拶をしているシーンが使われており、比較的女性支持者に囲まれている構成となっている。

### ●市民、海外の反応の構成

海外は、アメリカ、中国のみでアメリカの場合は「主流メディア」の反応として「選挙結果はブッシュ大統領の忠実な盟友が力を維持した」とのテロップ。中国の反応では人民日報の紙面と首相の靖国参拝映像を使用。

「街の声」は、一見オーソドックスな作りで15人（女性10人、男性5人）にインタビューしている。しかし、質問の部分をカットし、インタビューされている人はみな「…かな」「…じゃないですか」など、他人事のように選挙結果について答える人ばかりが登場する。この局も自民党に投票していないと回答する人は出てこない。

## フジテレビ系「ニュースジャパン」

### ●番組と選挙報道の構成

放送時間は23時45分から24時07分40秒で、時間量は22分40秒である。そのうち総選挙報道の時間量は13分21秒で全体の58.9%。CM時間3分30秒を除くと69.7%。選挙報道以外のニュース項目は4項目で時間量は5分25秒。

キャスター松本方哉、滝川クリステル、解説員の和田圭（産経新聞社）の構成。スタジオの松本と滝川の間には大きなモニター画面があり、前日の各党本部の様子や、候補者の事務所などのVTR画像が背景として流れている。

番組の流れは、スタジオから「衆院総選挙－運命の9.11主役たちは」（No.2）で選挙結果をまとめたVTRへ。VTRは「9.11の党首」「9.11の女たち」「9.11の造反組」「9.11の復活」「9.11のジュニア」「9.11のあの人」というテーマに沿って候補者を3分35秒のなかで次々と映し出す。白いバックに「9.11の党首」などのテロップが黒字で現れ、ドンドンというリズムをとる効果音とともに次々と切り替わり、まるで「紙芝居」のようにVTRが編集されている。

続いて番組のテーマ曲とともにCGのロゴがでて、「TODAY'S MENU」として「“審判の日”から一夜明け」、「惨敗の民主党－敗因は？」のタイトルがテロップで映し出される。

スタジオとVTRが細かく切り替わりNo.5では12日の小泉首相の記者会見を中心に、岡田民主党党首のコメントを構成、男性のナレーションで進行する。同じニュース項目の「自民党の地滑りの圧勝」では、海外のメディア

が今回の総選挙をどう取り上げているか、各国の新聞紙面・テレビ映像を流しながら男性のナレーションで解説するが、そのたびに〈小泉映像〉が映し出される。多くの登場人物のほとんどが、短いカットで次々に登場するのがこの番組の特徴である。

No.6「データでみる民主党の敗因」では、比例代表と小選挙区の自民党と民主党の得票数、小泉首相、岡田代表が応援演説をした選挙区での勝率の比較、造反議員の当選結果、女性の当選者数を自民党と民主党で比較した表など女性のナレーションで解説。No.7では小泉人気の結果起きたハプニングとして、繰り上げ当選をした保坂展人にインタビュー。

最後に、「今回の選挙の分析」では臨床心理士の矢幡洋にインタビュー。「小泉総理は“熱狂者”で、若い人を惹き付けた」、「日本人社会全体の思考力、批判精神が低下しているのでは」とのコメントを使用している。

### ●〈小泉映像〉

それぞれのニュース項目の時間量は短いのに〈小泉映像〉がちりばめられている。小泉首相の記者会見映像だけをみても、画像だけで11回出てくる。音声が入っているのは4回あるが、その総時間量は54秒にすぎない。記者会見の部分以外も小泉映像は各項目に登場し、特に党本部で当選者の名前にバラを付け微笑む姿のVTRなどは、何回もくり返し使われている。

矢幡洋にインタビューするニュース項目でも小泉首相の過去の演説シーン、著書のサブタイトル、首相と演説を聞いている人びとの映像など短時間で〈小泉映像〉が多用される。

### ●女性候補者の構成

No.2のニュース項目で2番目のテーマ「9.11

の女たち」で小池、片山、佐藤、藤野の4人が登場。6番目のテーマ「女性議員の当選」で小淵優子、高市早苗、藤野の3人が登場するが、全員事務所で支持者と「バンザイ」をしているシーンで時間量は各々ほんの2～4秒である。

コメントが入っているのは、社民党の福島みずほ党首（参議院議員）、「造反組」として当選した野田、「復活」議員の辻元、「あの人」として登場の田中と土井の5人。5人とも時間量は12～14秒。コメントの内容は野田が「苦しい戦いでありましたが、みなさんが支えてくれて皆様に勝たせていただきました」、辻元が「浮き足立たずに、国会活動始めさせていただきます」、土井は「報道ステーション」で使われている会見のあとで「引退ですか」という質問に不機嫌そうな顔で「どこで引退っていいました？」という発言の部分だけが使用されている。

今回の選挙で多く使われてきた「刺客」「くの一」などの表現は一度も使われていない。

### ●市民、海外の反応の構成

市民の声は全くない。市民が登場するのは、選挙中に候補者の演説を聞く「群集」として背景として使用される映像だけである。

海外のメディアでどう報道していたかを、「自民党の地滑りの圧勝」の項目で構成。新聞は中国・イギリス・韓国・アメリカの紙面を使用、バラを指差し微笑む小泉首相の写真を挿入する。韓国・中国で放送されたテレビ映像でも小泉首相が笑顔で歩く姿などが使われている。韓国のテレビ映像では、紋付と袴姿で靖国神社を参拝したときの映像を流しつつ、中国と韓国が今後の小泉首相に対し警戒している点を指摘している。

## TBS系「ニュース23」(2005.9.12 22:54-23:50)

No	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
1	22:54:00	OP	番組ロゴ、小泉純一郎(9月11日会見)、小泉スーパーマン(CG)、(番組タイトル)「2005衆院選 ニッポンの分かれ道 コイズミ的を問う 自民圧勝」	①CU ⑦小泉スーパーマンのCG	0:35
2	22:54:35	スタジオ	「開票結果」筑紫哲也、草野、佐古、ゲスト:ジェラルド・カーティス(コロンビア大学)		1:56
3	22:56:31	VTR	「圧勝 自民“ポスト小泉は”」(自民党本部)小泉(会)/小泉・神崎ら公明党役員	①CU, Z-in, long, Cu ⑤CU	1:49
4	22:58:20	VTR	「惨敗民主後任は」岡田/岡田・党役員/菅(イ)/枝野(イ)/小沢(演)		1:00
5	22:59:20	スタジオ→VTR	「当選ドキュメント 刺客選挙区は」「劇場の主役たちは」小泉(党本部)・役員/「東京12区」小池ゆり子(会)/小林興起(イ)/「広島6区」堀江貴文(会)/亀井静香・綿貫/亀井(会)/「岐阜1区」野田(イ)/神主、佐藤ゆかり(イ)/「静岡7区」片山さつき(イ)/城内実(会)・支持者/開票翌日街頭での城内/民主党阿部/「激戦区」の東京1区」海江田万里・支持者	①CU ①CU	6:10
		VTR	「泣いた人笑った人」岡田(民主党開票センター)/岡田(会)/鈴木宗男(ホテルでイ)/(事務所)鈴木・松山千春・支持者/小泉/福島(みのもんたのバラエティ番組のスタジオ)/小池/土井孝子/辻元清美・支持者/開票翌日街頭での辻元・支持者		
6	23:05:30	スタジオ	「列島に吹いた小泉旋風「有権者は何を選んだか」筑紫、カーティスに(イ)	①CU, XCU	3:05
7	23:08:35	VTR	「自民党大勝に街の声は」男性(40代)/女性2人(40,50代)/女性2人(30代)/女性2人(30,50代)/東京証券取引引き市場/男性(60代)/女性2人(20代)/女性(20代)/男性(20代)「自民大勝に海外の声は」ブッシュ・小泉/「人民日報」/小泉(靖国神社)	①CU ⑥(ブッシュとの会見) ⑦(靖国神社)	2:07
8	23:10:42	スタジオ	「日本の政治は変わったか」「コイズミ政権のゆくえ」筑紫、カーティス イ	①CU	6:18
9	23:17:00		CM		
10	23:18		小林前議員の私設秘書 他人になりすまして投票		3:20
	23:20:20		厚労省課長代理 議員宿舎に赤旗 追送検		
11	23:21:17		CM		1:59
	23:23:16		同時多発テロから4年 追悼式典で反戦の声も		2:28
12	23:25:44		CM		2:00
	23:27:44		多事争論「民意」		1:43
13	23:29:27		ニュースINDEX イラク撤退を英・豪が打診		3:06
	23:30:12		ディズニールランド香港にオープン		
	23:30:43		イスラエル ガザ地区から完全撤退		
	23:31:50		カテリーナ 直撃から復興へ		
14	23:32:17		台風15号 中国100万人避難		
	23:32:33		CM		1:35
15	23:34:08		スポーツ		8:07
	23:42:15		CM		1:59
16	23:44:14		天気予報		1:06
	23:45:20		ED		

## フジテレビ系「ニュースJAPAN」(2005.9.12 23:45-24:07)

No	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
1	23:45:00	スタジオ	松本方哉・滝川クリステル 小泉純一郎・武部勤/岡田克也/神崎武法・浜四津敏子	①(キャスターの間のモニター)バラ	0:15
2	23:45:15	VTR	「衆院総選挙 運命の9.11主役たちは…」 ・「9月11日の党首」岡田克也(会)/志位和夫(会)/福島みずほ(会)/綿貫民輔(会)/田中康夫(会)/神崎武法(会)/小泉(会) ・「9月11日の女たち」小池百合子/片山さつき/佐藤ゆかり/藤野真紀子 ・「9月11日の造反組」亀井静香(会)/野田聖子(会)/小林興起(会) ・「9月11日の復活」鈴木宗男(会)/辻元清美(会) ・「9月11日のジュニア」石原宏高・(石原慎太郎)/橋本岳・(橋本龍太郎) ・「9月11日のあの人」田中真紀子(会)/土井たか子(会)/堀江貴文(他) ・「9月11日の当選者480人 落選者651人」	①会見CU	3:35
	23:48:50		番組ロゴ(CG) BGM(番組テーマ音楽)		0:08
3	23:48:58	VTR	「TODAY'S MENU “審判の日”から一夜明け…」小泉 「TODAY'S MENU 惨敗の民主党…敗因は？」岡田	④会見CU	0:12
	23:49:10	スタジオ	提供主名のテロップ 松本/滝川/和田圭(解説員)		0:12
4	23:49:22	スタジオ +VTR	「小泉首相 郵政民営化法案に全力」 松本・滝川/小泉/小泉・岡田	⑤ ④CU ②CU	0:28
5	23:49:50	VTR	「小泉自民党圧勝から一夜」 小泉(会)・岡田(会)/小泉 「自民・公明両党 特別国会を21日召集する方針をきめた 武部ら与党幹事会」小泉(会)/小泉・武部 国会郵政法案投票VTR 田中直紀・秋元司/小泉(会) 「民主党 執行部は15日総辞職 17日の両院議員総会で新代表を選出」 岡田(イ)(党本部の出口で記者に囲まれて)小泉/小泉(会) 「自民党の地滑りの圧勝」 小泉/小泉/小泉/小泉	④CU ④CU ① ④CU ④CU ④CU ② ① ⑦町で手を振る ⑥	4:10
		スタジオ スタジオ +VTR	ワシントンポスト(米)・ガーディアン(英)・ルモンド(仏) 3誌を並べて 松本(コメント) 「総裁任期と総理の任期」 和田(コメント)	① ⑤ ④CU	
6	23:54:00	スタジオ +VTR	「データで見る民主党の敗因 なぜ民主党は敗北したか？」 松本・滝川/小泉/小泉/森喜朗(200年会見VTR映像のみ)/小泉・岡田/小泉 「造反議員の選挙区」 野田(万歳)/小池(万歳)/岡田(党本部) 「女性議員の当選」 小淵(万歳)/高市早苗(万歳)/藤野(万歳)小泉	① ④ ① ③ ③CU ⑦町を歩く	1:41
7	23:55:41	VTR	「社民党保坂展人氏繰り上げ当選」 保坂展人(イ)(事務所)		0:28

(つづく)



## フジテレビ系「ニュースJAPAN」(2005.9.12 23:45-24:07)

(つづき)

No	時刻	分類	ニュース項目(タイトル、ニュースの内容)やCM 「」:テロップ引用、(イ):インタビュー、(会):会見、(演):演説、(他):その他	小泉映像	時間量
8	23:56:09	VTR スタジオ	今回の選挙の分析 矢幡洋(コメント)/小泉 著作「アイドル政治家症候群」慎太郎・真紀子・康夫・純一郎に惹かれる心理/矢幡(コメント)/小泉/小泉(演)/矢幡(コメント)/小泉/矢幡(コメント)/松本(コメント)	④CU ⑦著書のサブタイトル「純一郎」 ④CU ⑦過去の演説 ⑦演説をきく人びとを上空からヘリ映像 ④ ①バラ	2:12
	23:58:21	スタジオ	次の項目予告(香港ディズニーランド開園)		0:09
	23:58:30		CM		1:30
9	24:00:00		アジアシフト ディズニーランド開園!香港		2:35
10	24:02:35		米国務次官補 韓国統一相と会談		0:55
	24:03:30		CM		1:00
	24:04:30		提供主名のテロップ(以上全国版ニュース)次の項目予告(復活の日)		0:10
	24:04:40		CM		1:00
11	12:05:40		警視庁官舎で機関紙配り逮捕		0:25
12	24:06:05		涙にくれる復活の日(ニューオリズ フレンチクォーター)		1:30
	24:07:35		エンディング 松本・滝川		0:05
	24:07:40		番組終了		



## ケータイ社会を生きる —携帯電話とメディア・リテラシー—

畠山 亮太 (FCT会員)

現代の情報社会において、私たちに最も身近なメディアは何であろうか？ テレビであろうか？ 新聞であろうか？ それともパソコンであろうか？ 人によって答えはさまざまであろう。しかし、この問いに対して「ケータイ！」と答える人は、特に若い人たちを中心にかなりの数に上るのではないか。

これまでメディア・リテラシーといえ、テレビや新聞に偏る傾向があったが、これほどまでに現代社会に浸透（氾濫？）している携帯電話を取り上げたことは、それほど多くないと思われる。そこで今回は、「携帯電話」に関するメディア・リテラシーについて、考えてみたいと思う。

携帯電話の契約数は、2004年8月末の時点で約347万件であり、日本の人口のおよそ65%にもなる<sup>(1)</sup>。携帯電話自体も日々進化してゆき、電話・電子メール・インターネット・カメラ・ビデオ・音楽・テレビなどの諸機能から、銀行振り込みやチケット予約、買い物までできるようになってきている。また、登場当初は、ビジネスマンの仕事のための単なる道具に過ぎなかったものが、ポケベルブームの延長線上で若者たちに受け入れられ、今や主婦層はもちろん、小学生や高齢者まで携帯電話を所有する状況に至っている。「最低1人1台の携帯電話」の時代も決して遠くない今日、私たちのあらゆる生活領域に及ぶまでになった携帯電話によって、社会はどのように変わってきたのであろうか。そこで、携帯電

話の課題として考えられる事柄をいくつか挙げ、携帯電話の特性とそれによる私たちの生活の変化の一端を探ってみたいと思う。

### 「私的空間」の創出

携帯電話についてまず問題にされるのが、公共空間とマナーの問題である。常に問題にされる電車内や授業中におけるケータイの使用などはもちろん、もっと広い意味で捉えるならば、他者と対面している場面におけるケータイの使用である。例を挙げると、友人のおしゃべりの最中や家庭での食事中にケータイが鳴り、目の前の相手を「無視する」かたちでケータイの相手とおしゃべりをする、といったような状況である。「友人や家族とのプライベートな時間」という場面は、「公共」とは言えないかもしれないが、目の前の相手に不愉快な思いをさせる可能性が高いという意味では、「公共的な空間（場面）」と言うこともできなくもない。これらに共通することは、携帯電話が、「公共空間」のなかに「私的空間」を作り出す機能を備えているということである。そもそも、電話というメディアは私的なメディアである。しかし、携帯電話が普及する以前は、電話機は公共施設や家庭に定められた場所や、街中の電話ボックスなど、「私的空間として利用しても許容される場所」に設置されていた。しかし、文字通り「携帯」できる私的メディアは、ありとあらゆる場所を「私的空間」に変える力を持っており、

「私的空間」を携帯していると言うこともできる。

### 匿名性と情報量の逆説性

次は、携帯電話の匿名性の問題である。パソコンのインターネットとも共通するが、この問題に関して真っ先に思い浮かぶことは、「出会い系サイト」ではないであろうか。「出会い系サイト」が発端となった事件としては、殺人事件、援助交際・売買春、最近では、ネットによって集まった人による集団自殺などがある。警察庁のまとめによると、「出会い系サイト規制法」が施行（2003年9月）された2003年の1年間に、出会い系サイトが関係した事件の摘発総数は1746件で、児童買春(791件)、青少年保護育成条例違反（448件）の順であり、被害者の84%（1262人）が18歳未満の女子（高校生597人、中学生397人、小学生4人）であったという<sup>2)</sup>。こうした問題の原因のひとつが、インターネットの匿名性である。お互いに顔も名前も素性もわからず（正確な情報であるのか判断できず）、手掛かりは画面上に映し出される画一的な文字情報だけである（しかも、その信憑性も疑わしい）。こうした、情報が膨大に詰まっている反面、判断材料となる情報が少ないという逆説性は、ネットの大きな特質である「匿名性」が生じさせたものであろう。

### 秘匿性と行動の個別化

3点目に焦点を当てようと思うのは、携帯電話が持つ「秘匿性」である。これは、右記二つの論点とも重なり合う内容であるが、つまり、持ち運びができ、匿名的であるがゆえに、周囲の人びとの目を盗んでケータイを使

用できるということである。小中学生の家族が、子どもたちにケータイを持たせたくないと感じる最も大きな理由も、この秘匿性に関係があるのではないであろうか。ケータイを持つことで何か事件に巻き込まれるのではないかと心配することはもちろん、そこまで大袈裟でなくとも、自分たちの子どもがどんな相手と繋がり、どんな情報にアクセスしているかを把握できない不安は、子どものケータイ所持を禁止するには十分な理由であると想像できる。子どもたちのテレビや新聞への接触なら、ある程度の把握やコントロールは可能であるが、家の外へも、トイレの中へも、ベッドの中にも持ち込め、また、情報がダイレクトに子どもたちに届くケータイはそうもいかない。おまけに、勝手にケータイをいじったり、メールを見ようものなら、家族への反発や不信感を募らせ、家族から気持ちが離れた子どもたちは、ますますケータイの「トモダチ」の方へ寄ってゆく、という悪循環に陥ることもある。

また、これに伴い、行動全般がケータイに左右される事態が生じてくる可能性もある。近年の子どもたちは、際限のない「孤独感」



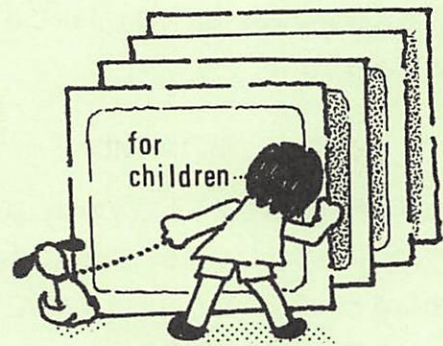
や「疎外感」に脅かされていると言われている。つまり、「自分自身の存在を確かめる」ために、絶えず「だれかにつながりたい」欲求（強迫観念？）が生じているというのである。ケータイはその欲求を満たすツールであり、それゆえ、ケータイを一時も手放せず、ケータイ中心の生活になるのではないか。「ケータイをうちに忘れてきちゃった！ どうしよう……」「何をしてても電話がきたらすぐに出なくちゃ！」「メールの返事が返ってこないと死にたくなる……」という具合である。そして、何よりも見過ごしてはいけないことは、いつも顔を見ながら過ごしている家族よりも、電波の向こう側の顔の見えない「トモダチ」が、「自分の存在を証明してくれる」その「だれか」になってしまっていることであろう。

以上、携帯電話についてのいくつかの問題に触れてきたが、もちろん、携帯電話にはマイナスの面ばかりではなくプラスの面もある。むしろ、携帯電話の特性とともに、今日のメディア社会の特性を理解し、その長所を活かすような使い方をすれば、これほど便利で、楽しいメディアはないのではないかとさえ思えてくる。では、携帯電話を便利で楽しいメディアに変えるにはどうすればいいのであろうか。その一つの方法こそが、メディア・リテラシーであると確信している。

メディア・リテラシーの定義は次の通りである——「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという」<sup>3)</sup>。つま

り、メディア・リテラシーは、メディア社会で生きるために、メディアをクリティカルに分析する力と多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を獲得することを目的としている。携帯電話は、もはや「電話」とは言えないほどマルチメディア性を備え、多種多様な情報を相互にやり取りできる。そのため私たちは、時間や場所を問わず、多種多様な情報のダイレクトな発信者にも受信者にもなることができる。だからこそ、携帯電話を扱うには、メディア・リテラシーの獲得が必要不可欠の条件であると言わざるを得ない。そして、それは、携帯電話を所有しているその人自身だけではなく、子どもに携帯電話を持たせようとしている（あるいは、すでに持たせている）家族にも同様の話である。

先程も述べたように、携帯電話は、その「匿名性」という特質によって、情報の過大と過小とが同時に発生している。そうした膨大な情報の中に身を置きながら日々生活してゆくには、その情報を社会的文脈においてクリティカルに分析する能力がなくてはならない。「虚偽」の情報に踊らされたり、甘い罠に引っ掛かったり、犯罪に巻き込まれないための



一番の近道がメディア・リテラシーの獲得だと考えられる。

また、メディア・リテラシーの獲得における重要な取り組みのひとつが「対話」である。他者との対話、ひいては自己との対話を通して、知識や洞察力を学ぶのである。携帯電話を子どもたちに持たせている家族は、子どもたちと携帯電話について話し合ってみるのいいかもしれない。子どもたちと携帯電話について話すことで、携帯電話やメディア社会についてより深く知り、携帯電話をより便利に楽しく使えるようになるとともに、子どもたちとの間にコミュニケーションが生まれ、「自分の存在を証明してくれるだれか」がケータイの相手から、目の前の家族に代わるかもしれない……というのは楽観視しすぎであろうか。ただ、忘れてはいけないのは、子どもたちと話す際に、家族の意見を一方的に押し付けたり、子どもの意見を頭ごなしに否定してはいけないということである。メディア・リテラシーには「正解」がない。子どもを自分と同等の「ひとりの人間」とみなし、子どもたちの言葉に耳を傾けながら話してゆく。それが「対話」であり、それこそがメディア・リテラシーの取り組みの基本姿勢だからである。

冒頭でも述べたが、携帯電話についてのメディア・リテラシーは、まだ、それほど多く取り組まれてはいない。しかし、携帯電話がこれほど一般化し、飛躍的に進化している今日、これを避けて通ることはできない。この論稿を第一歩として、わたし自身も「ケータイ社会」を生きるためのメディア・リテラシーの獲得をめざしていきたいと思う。

(はたけやま りょうた)

- (1) 『imidas 2005』及び『統計でみる日本』参照
- (2) 日本子どもを守る会編『子ども白書 2004』196頁より
- (3) 鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』8頁より

#### ◆引用・参考資料

- 『imidas 2005』 集英社、2005  
『統計でみる日本』  
総務省統計局監修／財団法人日本統計局協会編集、2005  
『子ども白書 2004』  
日本子どもを守る会編 草土文化、2004  
『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』  
鈴木みどり編、世界思想社、1997  
『ケータイ学入門』  
岡田朋之・松田美佐編、有斐閣選書、2002  
『若者はなぜ「繋がり」たがるのか—ケータイ世代の行方—』  
武田徹、PHP研究所、2002  
『若者たちに何が起っているのか』  
中西新太郎、花伝社、2004

※本稿は月刊『解放教育』05年10月号に掲載されたものを転載させていただきました。



## FCT第7回メディア・リテラシー研修セミナー開催される

FCTでは第7回メディア・リテラシー研修セミナーを、2005年8月6日（土）～7日（日）に、かながわ女性センターの共催を得て、江の島（神奈川県）で開催した。

第7回研修セミナーの参加者は31人で、首都圏を中心に、北海道、秋田県、富山県、大阪府、京都府、静岡県など幅広い地域からの参加となっている。その所属も、大学、高校、中学校の各教員、大学院生や大学生、NPO関係者、行政職員、ジャーナリストと、FCTの主催ならではの多彩な参加者である。また、メディア・リテラシーの授業に取り組む教員にとっては、情報交換も含め、ともに学ぶための場として研修セミナーが定着しつつあり、複数回の参加者が増えている。

### ●「参加と対話」による学びの実践

このセミナーでは、2004年12月に刊行した『新版Study Guideメディア・リテラシー〔入門編〕』（鈴木みどり編、リベルタ出版）を中心に、『同ジェンダー編』、ビデオパッケージ『スキヤニング・テレビジョン日本版』（鈴木みどり監修、イメージサイエンス社制作）もテキストに組み込まれているので、多様で、実践的な講座が展開し、メディア・リテラシーの学びも一層深いものになっている。

プログラムは8セッション（S）で構成され、S1では、メディア・リテラシーの学びについて総合的に解説する講義があり、S2以降は、講義とワークショップを組み合わせ、参加型の講座になっている。その一部を紹介すると、S7では、「メディア社会を生きる市民

とメディア・リテラシー—コミュニケーションをつくりだす—」というタイトルで、前半では、「子どもと放送／メディアをめぐる世界の動き」について、メディア・リテラシー活動の歴史的展開をふまえての講義がおこなわれた。後半は、『スキヤニング・テレビジョン日本版』より、「人種差別をやめよう！PSA」を使用してのワークショップがあり、活発で楽しいディスカッションが展開した。

### ●参加者からの声

参加者からは、『スタディガイド』をただ読んでいた時よりも、VTRテキストを見て、分析シートに記入することにより、理解が深まった」というコメント（研究者／NPO）や、「自分のしてきた仕事がいかにステレオタイプであったかを振り返ることができたし、参加者の問題意識も刺激になった」との声（新聞記者）もある。また、「今後も研修セミナーを受講したい」という多くの感想とともに、「FCTによるワークショップのファシリテーターとしても、将来的には参加をしていきたい」という前向きな発言（大学教員）も届いている。

### ●次回研修セミナーの予定

FCTでは、今後もニーズに応え、研修セミナーを継続的に開催していく方針である。次回の第8回研修セミナーは、2006年3月25日（土）～26日（日）の2日間の日程で、大阪府とよなか国際交流センター（とよなか国際交流協会後援）でおこなう予定で、すでに準備を開始している。（まとめ 新聞清子）

# データベース

## 【海外篇】

### ●「物語を始める～3歳から7歳のための映画とリテラシーのリソース」英国映画協会(BFI) Starting Stories～A film and literacy resource for three-to seven-year olds, British Film Institute, 2003

英国映画協会(BFI)は、映画に関する調査・研究、並びに映像アーカイブの運営を担う半官半民の組織である。映画を活用したメディア教育に力を入れ、政府に対し政策提言もする。

「物語を始める」は3歳から7歳の子どもの対象にしたビデオ/DVDパッケージである(教師用解説書付)。

国際映画祭などで上映された数々のアニメーション作品から厳選された5編の短編が収録されている。就学前の子どもの対象とした目的について、このように説明している。「年少の子どもの教えるには、子どもの体験を認め、子どもがすでに持っている知識やスキルを増強すべきであることは一般に理解されている。『物語を始める』とそこで提案されている指導法は、映画の構成や約束事に関する子どもの新たな知識に教師が入り込み、映画の新しい見方、学び方を見つけることを奨励している」。

短編を教材に活用することについては、「短編の簡潔で、独立した構成は、わかりやすく、魅力的に『話を伝える』というナラティブ(物語)の一連の要素が集められている」とする。

アニメーションはいずれも3分から7分の短い物語であり、テレビで放映されている商業アニメを見慣れた子どもには、抽象的な表現に感じられるかもしれない。しかし、BFIは「抽象的な表現だからこそ、映像と音の創造的な活用を探究する機会がある」とする。同教材は2004年、英国教育事業協会から教材賞を受賞。制作には、BFIのスタッ

フを始め、30数名の小・中学校教師、350人の子どもが協力している。

BFIは、全国カリキュラムと全国リテラシー戦略をもとに、子どもの就学年齢に応じて、学びの段階(stage)を設定している。Key Stage1は5歳から7歳、Key Stage2は7歳から11歳、Key Stage3は11歳から14歳を対象とする。「物語を始める」では、さらに、3歳の基礎段階(Foundation Stage)と4-5歳の幼児学校(日本の幼稚園に当たる)1年生(Reception Year)に分けている。

教師用解説書は7章で構成されている。序章では、解説書に以下の内容が網羅されていることが明記されている。

映像の基本的用語や概念を含む映像言語入門  
映画テキストが持つ豊かな可能性をリテラシーとの関係で開発する方法

映画を指導教材として効果的に活用する手引  
収録されている映画に関する情報

映画やリテラシー指導戦略と活動の実例

第1章の「カリキュラムの中での映画」では、映像メディアは「私たちに多様な人物や状況を提示し、多様な世界観を提供する」と述べ、「映画を通じた学びは、①コミュニケーション、言語とリテラシー、創造的な発達、②個人的発達、社会的発達、情緒的発達、③世界に対する知識と理解、④身体的発達、⑤数理的発達に関係している」という。

ここでは、基礎段階、幼児学校の1年生、Key Stage1のそれぞれの段階ごとのコミュニケーション、言語とリテラシーの学習目標と映画学習目標があげられている。例えば、基礎段階のコミュニケーション、言語とリテラシー学習目標は、「継続して視聴すること」「会話で交替ができる」「明瞭に話す」「語彙を増やし、意味を探る」「物語に反応する」、映画学習目標は、「テーマやあらすじに注目して映画テキストを活用する」「適切な言葉(キーワード、ショット、キャラクター、状況などを含む)を使用し映画テキストの分析を始め

る」「映画についての意見を述べる」「他の子どもとの視聴経験をもとに映像についての意見を共有する」などがあげられている。

第2章の「映画言語入門」では、映画を構成する基本的要素を3つのS（「物語」Story、「状況設定」Setting、「音」Sound）と、3つのC（「色調」Color、「登場人物」Character、「撮影」Camera）で示し、さまざまな問いかけをすることで学んでいく。

第3章から第7章は5編のアニメーションを使った活動である。第3章「月のバブーン」は、2002年のロンドン映画祭で幼児を対象に上映されたクレイ・アニメーションである。主人公のバブーンは月に住む孤独な生き物。彼の日課は、毎夜、機械を操作して、月を照らすことである。ある夜、バブーンは月を照らしながら、青い地球を眺め悲嘆に暮れる。

教師用解説書では、この映像を活用し、各段階での授業計画を提案する。例えば、幼児学校1年生の授業計画はこのようになっている。①リソース：VTRの準備。②活動：地球から月に住むバブーンに送る物資のリストアップ。③準備活動：事前に映画を見て、「バブーンが地球との接触があるかどうか」「なぜ、バブーンは悲嘆に暮れるのか」を話し合う。④リテラシー学習目標：新しい言葉を集める（言語レベル）、書かれた文章は意味があることを理解する（文章レベル）、文章は多様な目的のために活用できることを理解する（テキスト・レベル）。⑤映画学習目標：対話やナレーションがなくても、考えが伝えられることを知る、話を伝えるには、道具が必要であることを確認する。⑥導入 クラス討論：バブーンはどうやって月へ行くか、再び、地球に戻れるかを討論。⑦発展的活動：スーパーマーケットのちらしから買い物リストを作り出す。間は映画学習活動：映画の中で使われている小道具のリストを作る。話を伝える上で、不必要な小道具を抜き書きし、それがないと物語がどのように変わるかを聞く。⑨全体討論

：バブーンを楽しませるには他にどのようなことが考えられるかを話し合う。⑩リテラシー・アセスメント：映画について話し合う際、どの子どもが小さなことに気を配り、登場人物に関連させているか。⑪映画学習アセスメント：子どもは小道具が（登場人物の）行動の重要な要素であり、それらが映画の上で状況/環境を創り出すことを認識し始める。⑫授業外での活動：バブーンを勇気づける手紙を書く。⑬教科を超えた授業外活動：音楽と舞踊～悲しい音楽とそれに合わせた動き。

第4章の「笑う月」は日本のアニメーション作家、西本企良氏の6分の作品である。月に見立てた黄色の円と、黒色の三角、四角、台形が様ざまに組み合わせたり音楽に乗って、人や動物を構成する。第5章の「小さな狼」は芸術系大学の卒業作品である。月を眺めていた狼が月を捉えようとする話。第6章の「ラッキー・ディップ」は人形アニメーション。少女が自販機でぬいぐるみのウサギを獲得するが、やがて、ウサギは本物に変身し、自然に帰る。第7章「もしそうでなければ」の主人公はカメレオンである。環境に応じて体色を変化させるカメレオンの特徴を生かし、生物や環境の多様性を知る。

BFIは、他に映像パッケージ教材として、Key Stage2を対象とした「短編映像」“Story Shorts”を2001年に、Key Stage3を対象とした「短編を上映する」“Screening Shorts”を2003年に刊行している。これらの映像を活用した教師向けの研修も実施している。

メディア・リテラシーには、クリティカルな分析、メディア制作を通じたクリエイティブな体験などさまざまなアプローチがある。BFIの子どもを対象とした映像教材もまたひとつのアプローチであり、短編映画を活用し、子どものリテラシー・スキルと創造力を強化することを目的としている。

（レビュー 高橋恭子）



# データバンク

## [国内篇]

●『新版メディア・コミュニケーション論Ⅰ、Ⅱ』  
竹内郁郎他編著、北樹出版、2005年5月刊。

「メディア・コミュニケーションとは何かの問いかけの書」として、19人の研究者が執筆分担する全18章、2巻から成る書。ここでは、鈴木みどりによる第14章「メディアとジェンダー」を取り上げる。この章で鈴木は、ジェンダーアプローチによる国内外のメディア研究の動向を概観している。その際、メディア・リテラシー研究で用いる「三角形のメディア研究モデル」を応用し、メディアテキスト、メディア政策、オーディエンスの3つの領域でジェンダー・アプローチによる研究がそれぞれどのように蓄積されてきたかを振り返り、今後の課題を論じている。

メディアテキストに関しては、マスメディアの内容分析に豊富な研究の蓄積があり、ジェンダーステレオタイプやメディアが形成する「女性文化」についての研究は、メディア産業のジェンダー構造を読み解く手掛かりとなっている。一方でカルチュラル・スタディーズの研究は、メディアによる表現はそれをどう読み解くかによって「意味」が異なってくることを明らかにした。ほぼ同時期に英語圏を中心に展開され始めたメディア教育、メディア・リテラシーの実践と研究は、参加型のワークショップの活動を実践的な学びの場として普及してきている。

メディア政策とジェンダーに関しては、1995年第4回世界女性会議で採択された「北京・行動綱領」に、その方向性が示されている。戦略目標をメディアへの女性の参加とアクセスを拡大し、メディア内容におけるジェンダーの平等と公正の促進に置き、各国政府、国際機関、マスメディアと広告組織に対する具体的な施策に言及している。スウェーデンやカナダでは世界に先駆けて、放送に公正をもたらしするための改革が行なわれているが、

日本では政治権力から独立した放送行政委員会が存在しないために、具体的なジェンダー政策を打ち出すにいたらず、大きくおくれをとっている。

オーディエンスとジェンダーに関しては、急激なICT化によって、政治、経済、社会、教育、文化のあらゆる領域で格差が拡大していることを注視すべきである。デジタル・デバイドといわれるこの格差を、ジェンダー、年齢、エスニシティ、階層、居住地域などの観点からとらえ直し、人間を中心とする包括的で公平な情報コミュニケーション社会を築いていくことが緊急の課題である。

2003年ジュネーブで開催された第1回「世界情報社会サミット」(WSIS)では、地球規模で拡大するデジタル・デバイドに歯止めをかけ、情報コミュニケーション技術の恩恵をすべての人に保障する「原則の宣言」と「行動計画」が採択された。WSISの一翼を担う市民社会セクターは、政府案を批判し、独自に北京綱領に基づいてジェンダーの公正、アクセスの平等の項目などを盛り込んだ「市民社会宣言」をまとめ、WSISの公式書類の一つに入れるよう要求している。

最後に筆者は、世界の様々な国や地域で多彩に展開されている主流メディアに対抗するオルタナティブ・メディア活動のほぼすべてで、ジェンダー・デバイドへの取り組みが重視されていることに触れ、このようなアクティブ・オーディエンスについての多角的、包括的な研究の蓄積がメディア・コミュニケーション研究を総体的に充実させ、人間を中心とする包括的で公正な情報コミュニケーション社会の構築に大きな役割を果たすことになるだろうと結んでいる。(E)

●『オーマイニュースの挑戦—韓国「インターネット新聞」事始め—』呉連鎬著、大畑龍次・大畑正姫訳、太田出版、2005年刊。

2002年12月、韓国大統領選における盧武鉉候補の勝利の裏には、形勢不利だった進歩的な候補を支持する若者達の声がインターネットを通じて全国を駆け巡るという背景があった。この時最も大きな影響力を持ったのが、著者の主宰するインタ

ーネット新聞『オーマイニュース』であった。

従来の一方向的なニュースのあり方のもどかしさから、2000年に記者4人で始まった『オーマイニュース』は、現在では記者数45人、1日約100万ページビューを誇るまでに至る。本書は、韓国の「新しいメディア」とされ、“市民参加型ジャーナリズム”の稀有な成功例として世界中から注目されている『オーマイニュース』の、誕生から現在へ至る5年間の記録である。

著者は、インターネットによって、情報の送り手の間に公正な競争の場を、ニュースの「質」で勝負するマスコミ文化を作りたいと言った。著者は、韓国社会の報道の構図が「8：2」（8割が保守的なマスコミで占められており、残り2割が進歩的なメディア）に分けられており、どんなに必要なことでも、どんなに礼参的に発言しようとしても、「8」が沈黙したらおしまいだということを月刊誌の記者としての経験から実感し、このマスコミの構図を「5：5」に作り変えることによって、韓国社会に民主主義を根付かせることが可能であると考えている。そして、『オーマイニュース』のすべてが込められていると筆者が強調する『市民みんなが記者』というコンセプトがインターネット上で実現されることによってこそ、韓国のマスコミを変えることができると考える。

『オーマイニュース』の最大の特徴は、『市民みんなが記者』のコンセプト通りの、自分の生活空間で発生するニュースを、既存の保守的マスコミの視点ではなく、自分自身の目線で記事を書く「市民記者」の存在である。職業的な記者ではなく、ふだんは会社員や主婦、学生として生活している誰もが、自分が世間に向かって何かを発信したいとき、いつでも「市民記者」に変身できるのである。「記者は特別な存在ではない。新しい情報を持っていて、その情報をほかの人に伝えたいすべての健全な市民が記者なのだ」ということである。

『オーマイニュース』が韓国で成功を収めた要因は、著者の信念や情熱と、それに附随する行動力の賜物であることは言うまでもないが、韓国国内のメディア事情も関連している。インターネット

のインフラが世界のトップレベルであること、マスコミに対する不信と不満が数十年にわたって積み重なってきたことなどが挙げられるが、なによりも、若い人たちの政治への参加精神がどの国よりも高いことである。インターネットという開かれた広場があっても、人びとの参加意志がなければ大きな力は発揮できないからである。

日本でも、マスコミへの不信や不満は少なからずあり、インターネットのインフラも整備されている。その意味では、日本でも『オーマイニュース』のような新しいメディアが成功する要素はある。課題は、市民の社会や政治への参加意識であろう。著者や本書解説を担当した浅野健一氏も、期待を込めてその点を指摘している。(H)

#### ●『NHK一問われる公共放送』松田浩著、岩波新書2005年5月刊。

本書は、NHKについて考察することを通して、なぜ公共放送が重要なのかを多角的に論じている。主な目次は次の通りである。

序章：いま、なぜ、NHKか－不祥事・政治介入疑惑の背景、第1章：国家の公共放送か、市民の公共放送か－政府と視聴者のはざま、第2章：NHKの体質はどのように培われたか－放送80年の足跡から、第3章：政府とNHK－自由と自律は保たれているか、第4章：巨大化の道と経営戦略－危機の構造とデジタル化、第5章：NHKと視聴者－試練に立つ受信料制度、第6章：市民的公共放送への道－再生のために何が必要か。

序章では、2004年の不祥事、2005年の政治介入疑惑は、NHKが「市民の公共放送」として視聴者と向き合い、ジャーナリズム機関として権力を監視するスタンスを堅持するという姿勢の欠落という共通の背景を持つと問題提起する。これは、人びとの「知る権利」に関わる重要な問題だが、筆者は個々の事象に目を奪われるのではなく、「公共放送の変質をもたらす〈経営戦略〉の歪みや〈政治とNHKの関係〉、さらにその根源にある〈制度上の問題点〉や〈歴史的な体質〉が明らかにされる必要がある」とする。そして、逆に今、公共放送

とは何かを徹底的に議論し、「市民のための公共放送」に改革するチャンスであり、そのことによって「消費者」から、放送を支える自覚的な視聴者を増やすチャンスでもある。同時にそのことは、NHKだけが問われているのではなく、視聴者・市民が「知る権利」、日本の民主主義と文化をどう考えるのかを問われていることを意味する。

以上のような問題提起の上で、2章以下の議論が展開する。2章では、公共性について議論するが、重要なことは第1に政府からの独立、第2に放送法にある「民主主義に奉仕」すべく、「国民に対する直接の職責」を負っている放送事業者がその「職責」をどう考えるかという主体的な姿勢であるとする。NHKの歴史を検討すると、公共性を「政府の政策を徹底させること」とした理解、すなわち戦後も「国家的公共性」の論理が根強く残り、「市民の公共性」が根付かなかったとする。

第2章では戦後民主的改革の一環として、電波3法が成立し電波監理委員会が設立されたにも関わらず、占領政策の変更やそれを受けた保守的な政治が続いたことによって改革が挫折させられた歴史を振り返る。

第3章では、政治との関係を検討するが、電波監理委員会が廃止されて以降、政府が電波を監理するという特殊日本的な状況の中で、政治からの干渉・介入を受け、NHK内部にも政権政党との「持ちつ持たれつ」の関係ができていったことを指摘する。

第4章では、政治との関係が深まる中で、NHKは積極的に衛星放送、ハイビジョン、地上波デジタル化などの「国策」を推進し、それが経営に歪みをもたらしたことを指摘する。

第5章では、公共放送として視聴者・市民の「知る権利」に責任を負う限り、権力から自立し、視聴者・市民に「参加」「公開」を保障すべきとする。そのためには内部の徹底した民主主義が必要だとする

第6章では、以上の議論を受けて、NHK再生に向けての提言を行なっている。それは、独立行政委員会制度の導入、経営委員会の改革と権限強化、

NHKと視聴者の「参加」と「公開」、従業員の内部的自由の確立、放送の担い手と視聴者の連携を深めること、視聴者の連携などである。(N)

●座談会「放送免許を考える」、『放送レポート』197号、メディア総合研究所、2005年11～12月。

同誌が昨年行った放送免許制度に関する連載の「番外編」。小田桐誠、松田浩、須藤春夫の3氏が、日本の放送免許制度・放送行政が抱える問題と、今後の方向について論議する。

小田桐氏が行った総務省への情報公開請求によって開示された資料が示していたのは、放送局は行政の前に「丸裸」にされる一方で、視聴者・市民への情報開示はきわめて不十分なものであり、免許制度の実態は戦前の『政府之ヲ管掌ス』と変わらないものであること。

放送免許制度によって放送のあり方が行政の側から枠付けされ、行政が再免許を梃子に、放送局と放送内容に踏み込んでくる状況が生み出され、「放送の自由」が奪われている。「放送の自由」は、多様性、多元性を生み出し、民主主義社会を作っていくうえで最も望ましい理念であるはずなのに、免許の「一本化調整」によって、多様性が失われ、放送局はどここの地域でも同じようになってしまった。

放送に関しては、独立行政委員会による管轄が先進国の趨勢となっており、韓国でもすでに採用されている。日本のように放送政策と管轄を一つの省庁が握っている国はきわめて異例だ。それは放送制度だけの問題ではなく、社会の民主主義的な仕組みの問題であり、国民の政治や地方自治に対する参加意識をいかに培っていくかという問題につながっている。テレビ局の側からも国民と共に、独立行政委員会の設置を求める運動を起こしてしるべきではないか。

今後、放送の自由を確保していくためには、公聴会方式など、免許プロセスのなかに視聴者が参加する道を開いていくことが重要である。放送は電気・ガス・水道などと同様に、暮らしのライフラインになっている。多くの人の役に立つと同時に

に、少数のマイノリティへの対応や保障も考えられなければならない。視聴者・市民の側に立った報道とは何なのか、ジャーナリズム機能をどう發揮していくのかといった議論が必要である。(E)

●「パブリック・アクセスの開祖たち—転機を迎えたアメリカのコミュニケーションTV—」魚住真司、『放送レポート』196、197号。メディア総合研究所、2005年9、11月号。

アメリカのケーブルTVのアクセスチャンネルの誕生期に重要な役割を果たしたリーダー3人に筆者がインタビューしてまとめた報告である。おもに教育や実践面での活躍でめざましかったジョージ・ストーニー（現NY大学映像学教授）はカナダでビデオを媒介とした地域住民のコミュニケーションツールとして機能しているケーブルTVと出会い、コミュニティTV構想を持つようになった。大学の附属機関として全米のケーブルTVに対するアクセス運動の拠点AMCを設立し、優秀なインターンを養成して全米に送り出した。各地に散った彼らによってコミュニティTVは実現していった。

ストーニーは今後のパブリック・アクセスチャンネルの課題として、コミュニティの限定、宣伝、ボランティア、フランチャイズ、リーダーシップを育てるなどの問題を指摘している。同時に、9・11以降の地域住民の保守化があらたな問題となりつつあるのも現状だとしている。

ニコラス・ジョンソンは1966年に32歳でFCC委員に抜擢され、1972年に「FCCルール」として3500以上の加入者がいるケーブルTV施設は送信可能な総チャンネルの1割をアクセスチャンネルとして地域に提供することを義務付ける法を整備したが、この法は後に曲折の上、任意性がもたされた。彼はFCC委員を辞めた後も市民のロビー活動を支援する地道な活動を行っている。

もう一人のジェローム・バロンはアクセス権という新しい概念を打ちたてて、アクセスチャンネルの法制化に貢献した。三人の開祖にインタビューした結果として、インターネットの普及とメデ

ィアコングロマリットによるメディア所有の集中化、市民としての生活様式の低下などがパブリック・アクセスに転機をもたらしつつあり、それは同時に現代のアメリカ社会が迎えた転機そのものでもある、と筆者は結んでいる。(K)

●「【特集】市民メディア ローカルメディア」、『月刊マスコミ市民』N.441、2005年10月号。

マスコミ市民10月号の特集は「市民メディア ローカルメディア」をテーマに次の内容で特集している。「市民メディアの現状と課題」（武蔵大学専任講師 松本恭幸）は、市民メディアの歴史、インターネットがもたらした展開、活字メディアの動向、インターネット新聞、市民ジャーナリズムの可能性、および今後の市民メディア普及の展望を質疑応答形式で紹介している。

「オーマイニュース、大韓民国の特産品」（「オーマイニュース」編集局社会部キム・ヨンギョン）は、市民は誰でも記者になれる韓国のインターネット新聞、「オーマイニュース」が創設されてから5年間の飛躍的な成長の背景としての双方向ジャーナリズムとその政治への影響について論じている。

「戦争と差別に反対する自立したジャーナリズムの構築へ」（アジアプレス・インターナショナル代表 野中章弘）では、フリーランスジャーナリストのネットワーク、アジアプレスの活動形態、扱うテーマ、設立の理念、参加者、今後の活動の展望などが質疑応答形式で述べられている。

「ブログの可能性と危険性」は、近年拡大中のブログについての概要の説明と、匿名性や情報の信憑性などの危険性に触れつつ、情報発信手段としてのブログに挑戦することを奨励している。

「身近な日本を中国へ伝える—東京視点」（『東京視点』代表可越）は、日本と中国をつなぐ目的で開設されたボランティアベースのインターネット放送局である。筆者は、制作に関わる一般の人々の視点を活かした番組づくりとその反響について述べている。(O)